

令和7年度 神山中学校 学校評価 総括評価表

評価指標 アンケート肯定的評価・・・80%以上：A, 79～60%：B, 59～40%：C, 40%未満：D

重点目標	重点目標を達成するための内容	生徒質問項目	評価	保護者質問項目	評価	教職員質問項目	評価	その他	
1 確かな学力を育成する学習指導	①主体的・対話的で深い学びの実現をめざし、ICTを活用した授業実践を展開する。	1 授業では、1時間のめあてを確認できていて、最後には1時間の学習を振り返っている。	B			1 (授業担当者) 授業では、めあてを明示し、学習の流れを確認して、最後には振り返りをやっている。	A		
		2 ペアやグループ等の話し合い活動では積極的に自分の考えを言っている。	A	1 子どもは、自分の考えをわかりやすく説明することができる。	B	2 (授業担当者) 授業では、ペアやグループ学習の場面を多く設定している。	A		
		3 ほとんどの教科の授業でタブレットが活用できている。	B	2 子どもは、学習用タブレットを家庭に持ち帰って有効に学習に使っている。	B	3 (授業担当者) 授業中の活動の中に、タブレットを活用する場面を積極的に取り入れている	B		
	②生徒自身が学びによって喜びや達成感を実感できる学習活動を展開する。		4 授業での学習活動において、楽しいと感じたり、やり遂げたことを実感できたりしたことがある。	A	3 子どもは、以前より学習への意欲が高まったと感じる。	B	5 (授業担当者) 生徒の関心を引き出し、達成感を感じさせる授業を工夫している。	A	
		③生徒が自分の将来にとって必要な学びを意識し、主体的に学習に取り組む態度を育てる。	5 積極的に自分の意見を述べ、主体的に授業に取り組んでいる。	A			6 (学年団教員) 自分の将来に向かって学習に臨めるようキャリア教育を進めている。	B	
			6 自ら進んで家庭学習に取り組んでいる。	B	4 子どもは、何も言わなくても自分から家庭学習を行っている。	A	7 (授業担当者) 生徒が家庭で主体的に学習に取り組めるよう手立てを工夫している。	A	

総合評価	次年度への改善策	学校関係者の意見
<p>・確かな学力の育成について、生徒や教員の評価に比べると、保護者の評価は高くない。保護者は、今以上に学習に取り組んだり育成したりしてほしいという要望があると考えられる。</p> <p>・学校でも家庭でもタブレットの活用が十分とは言えない状況であり、学年差もある。授業や家庭でのタブレットの活用やその方法について改善を図る必要がある。</p> <p>・授業でのめあての確認や振り返りについて、生徒と教師との評価に差があり、生徒に十分に意識させられていないという課題がある。</p> <p>・生徒や教職員は授業時の話し合い活動が充実していると考えているが、保護者は子どもが自分の考えをわかりやすく説明する力が十分に備わっていないと感じている。</p> <p>・保護者や教員は子どもの家庭学習への主体的な取り組みに対する評価は高いが、生徒の実態は同等ではなく、学年差もある。</p>	<p>・校内研修等を行い教員のタブレットの活用能力を高め授業での活用機会を増やすとともに、生徒が学校や家庭でタブレットを有効に学習に使用できるよう指導したり内容や方法を検討したりする。</p> <p>・学習活動の中で話し合い活動の機会を多く設定し、自分の考えを適切に表現できる力の一層の向上を図る。</p> <p>・わかる授業を行うとともに進路学習や合同学習等を重ねて学ぶ意欲を高め、家庭学習への意欲的な取り組みにつなげる。</p> <p>・めあての確認と振り返りをどの授業でも行い、それを生かした効果的な授業を実践する。</p>	<p>・タブレット活用の時間が長ければ良いというものではない。タブレット活用することが目的ではなく、学力向上につながる事が目的である。</p> <p>・確かな学力を様々な方法で育成することが必要。</p> <p>・求められる学力が変わってきたのか。かつてはテストで良い点をとることだったが。</p> <p>・テストは紙で行っているのか。小テストはタブレットを活用して実施してはどうか。</p> <p>・他校に比べてテストの回数が少ないのではないかな。</p>

2 個に応じた特別支援教育の充実	①生徒一人ひとりの特性や学習スタイルに応じた支援の提供をおこなう。	7 自分に合った方法やペースで学習に取り組むことができる。	A	5 学校は、子どものよさや特性を尊重してくれている。	A	8 (全教員) 保護者と連携して生徒の特性等を把握し、教職員間で共通理解ができています。	A	
		8 わからないときには、先生や友達に質問することができる。	A	6 学校は、子どもの学習状況について面談等で適切な助言をしてくれる。	A	9 (授業担当者) 生徒の反応や学習状況に応じて、指導方法を柔軟に調整できている。	A	
	②通常学級における合理的配慮の推進を進めると共に、特別支援学級での指導の充実と支援体制の強化を図る。					10 (授業担当者) 多様な個性を認め合う風土を醸成し、生徒が安心できる環境を作っている。	A	
		③特別支援教育コーディネーターを中心に教職員間の連携を図り、適切な指導方法を共有する。				11 (授業担当者) 具体的かつ段階的な目標・計画を設定するとともに、定期的に見直し評価と改善を行っている。	A	
					12 (全教職員) 必要に応じて関係機関や専門機関と連携し、校内委員会等を通して共通理解を図り対応している。	A		

総合評価	次年度への改善策	学校関係者の意見
<p>・個に応じた特別支援教育は概ね充実していると考えられる。</p> <p>・生徒一人ひとりの特性や学習スタイルに応じた支援の提供について、生徒・保護者・教員の評価が一致しており、充実度が高いと推測される。</p> <p>・生徒質問項目8、保護者質問項目5は肯定的回答が90%となっており、学校の個に応じた支援の取り組みが評価されている。</p> <p>・生徒質問項目7はA評価ではあるが、肯定的回答は80%であり、更なる充実をめざした取り組みが必要だと考える。</p> <p>・教職員のすべての質問項目の肯定回答は高値であり、教職員の個に応じた指導に対する意識の高さが推測できる。</p>	<p>・各教師が効果的な学習方法の例を示すとともに、自主学習コンテストなどを活用し、友だちの有効な学習方法を参考にする。</p> <p>・保護者や教師間での連携を密にし、全教職員のよる、より充実した個に応じた指導を図る。</p>	<p>・小規模校の取組の良いところが出ている。ぜひ個に応じた指導を続けて、さらに充実させてもらいたい。</p> <p>・同じ専門教科の教員が複数いる場合は、複数の教員で交代で授業を担当してもらうことはできないか。教え方が違うと、自分にあったやり方が見つかりやすいのではないかな。</p>

3 豊かな心と健やかに生きる力を育成する。	①基本的な生活習慣の定着を図り、運動機会を大切にするとともに、特別活動等を通して自主性や創造力を伸長する。	9 大きい声で友達や先生にあいさつしている。	A	7 子どもは、早寝早起き・朝ごはんなどの生活習慣が身につけている。	B			
		10 部活動は楽しく、積極的に参加している。	A			13 (部活顧問) 生徒は部活動で自発的に行動できている。	A	
		11 神中祭等の行事や委員会活動などで、意見を出したり、進んで活動したりできた。	A	8 神中祭等の行事で、生き生きとした子どもの姿が見られた。	A	14 (全教職員) 神中祭等の行事においては、生徒の意見や自発的な行動を促す工夫ができた。	A	
	②人権を尊重する精神を育み、同和問題をはじめとする人権問題についての正しい理解と実践力の育成に努める。	12 道徳等の時間に友達と話し合ったり、手を挙げて考えを発表したりできている。	A	9 子どもは、やさしい人間として育ってきていると感じている。	A	15 (学年団教員) 道徳等の時間に、生徒同士話し合う場面を積極的に取り入れるよう工夫している。	A	
		13 学級での人権学習や合同学習は自分にとって大切な勉強だと思う。	A	10 子どもは、友達と良い人間関係を築き上げている。	A	16 (学年団教員) 道徳や学活の時間に計画的に同和問題をはじめとする人権学習を進められている。	A	
	14 合同学習や清掃等の縦割り班活動を積極的に行っている。	A						
③特別支援教育のための校内体制を充実させ、適切な合理的配慮を提供する。	15 先生は、一人一人に応じた対応をしてくれている。	A			17 (全教員) 個々の教員が特別支援教育への学ぶ姿勢を大事にし、協働的な校内体制ができている。	A		

総合評価	次年度への改善策	学校関係者の意見
<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな心の育成と健やかに生きる力の育成について概ね推進できていると言える。 ・本校の部活動や学校行事、人権教育や特別支援教育が、豊かな心と生きる力の育成につながっていると推測できる。 ・子どもに望ましい生活習慣が十分に定着していないと感じている保護者もいる。 ・保護者質問項目の8,9,10についての肯定的回答は高い値であり、生徒は豊かな人間性を育み、良好な友達関係を築いていると評価されている。 ・生徒質問項目の9,10,13,14の肯定的回答は90%を超えており、生徒は部活動や合同学習、縦割り班活動に意欲的に取り組むことができていると推測される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、アンケート調査の結果等も踏まえ、生徒が自分自身の生活を見直したり生活を改善したりするために、食育やSNS等の適正利用についての指導に取り組み、基本的な生活習慣の定着につなげる。 ・生徒会活動を活性化させ、よりよい生活に向けて、主体的に取り組む姿勢を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校外から、こんなことをやらせてほしいなどと要望はないのか。様々な体験は必要だが多すぎるのではないかな。断ることも必要。 ・学力をつけることが一番である。学力をつけるために様々な体験をすることは必要ではあるが。 ・男子の駅伝がよく頑張っている。

4 実践力を育む人権・道徳教育の推進	①教育活動全体をとおして人権尊重を捉え、全教職員の総意に基づき人権教育を徹底・浸透させる。	16 学校では安心して過ごすことができる。	A	11 子どもは、学校に安心して通うことができている。	A	18 (全教職員) 授業や学級経営、行事等において、人権尊重の視点を取り入れている。	A	
		17 友達の気持ちや立場を考えて行動できる。	A	12 子どもは、家庭で友達や先生の話をよくしている。	B	19 (全教職員) 生徒や保護者との対応において、相手の尊厳を尊重した対応ができている。	A	
	②職員研修を充実させ、教職員自身の人権感覚を磨き、実践的な指導力の向上を図る。					20 (全教職員) 人権教育に関する校内外の研修に主体的に参加し、授業で活用したり他の教員に共有したりしている。	B	
		18 先生は、困ったことがあればすぐに対応してくれる。	A	13 学校は、子どものことについて適切に相談に応じてくれる。	A	21 (全教職員) 多面的な視点をもって個々の生徒と関わっている。	A	
③縦割り班活動を活用することで、人権教育をより実践的に学び、助け合いの大切さや責任感、生徒がお互いを尊重する態度を養う。	19 他学年の仲間と協力して班活動等を行うことを通じて、成長することができた。	A	14 子どもは、他学年の生徒と共に様々な活動を通して成長している。	A	22 (学年団教員) 学年を超えて発言しやすい雰囲気を作るために適度な支援や配慮ができている。	A		

総合評価	次年度への改善策	学校関係者の意見
<ul style="list-style-type: none"> ・実践力を育む人権・道徳教育は概ね推進できていると推測できる。 ・生徒、保護者、教職員の良好な関係が概ね構築できていると推測できる。 ・すべての生徒質問項目において肯定的回答が概ね90%以上に到達しており、学校において良好な人間関係のもと協力して生活できていると推測できるが、肯定回答していない生徒もいる。 ・教職員の人権教育に関する研修や学びの活用・共有に対する更なる充実した取組が必要である。 ・思春期を迎えた発達段階ということもあるためか、家庭では学校のことをあまり話さない生徒もいるようである。 ・保護者の評価も高いが、数値的にみると生徒の評価より低く、十分な推進に向けて取組改善の必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業参観やオープンスクール等、保護者が学校生活の様子をみることができている機会への参加を促す。 ・人権学習や道徳教育の校内研修を計画的に実施し、全教職員の人権感覚や指導力の向上に努める。 ・全教職員で子どもに関わったり保護者と連携したりして、すべての子どもが安心して過ごすことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人権教育の研修での学びを共有する機会が少ないのか。 ・少数だが、肯定回答でない生徒や保護者もいる。その部分を大切に考えていく必要がある。 ・人権教育のさらなる充実をめざしてほしい。 ・現在の人権教育は、ハンセン病の学習が中心なのか。 ・現地へ行って学習することは、非常に大きな意味がある。

5 協働した組織的な業務執行体制により、機能的で合理的な学校運営を行う。	①教職員個々の取組の上に教職員の協働した取組を重ねる。					23 (全教職員) 自分の役割を責任を持って果たすとともに、他の教職員の役割にも協力することができた。	A	
						24 (全教職員) 自分が行っている業務を改善するために、他の教職員からのアドバイスを受け検討した。	A	
	②全教職員による共通理解を大切に、個々の学びの成果を教職員全員と共有する。					25 (全教員) 自分が研修してきた内容を他の教職員に広めることができた。	A	
						26 (全教職員) 教職員間の人間関係は良いと感じる。	A	
③全ての業務を見渡したときに公平感が感じられる組織づくりを進め、学校の体制としての働き方改革を推進する。					27 (全教職員) 学校全体として働き方改革が進められている。	A		
					28 (県費職員)校務支援システムやグループウェアの運用について理解が深まり、昨年より適切に活用できた。	A		

総合評価	次年度への改善策	学校関係者の意見
<ul style="list-style-type: none"> ・協働した組織的な業務執行体制により、機能的で合理的な学校運営が概ね達成できていると推測できる。 ・個々の教員が受講奨励に伴う研修を受講し、そこでの学びを活用・共有する機会をつくることで、教職員が最新の知識を学ぶ機会を数多くつくることできた。 ・本年度は初任者研修、ジャンプアップ研修、ミドルリーダー研修、新任教頭研修と各段階での悉皆研修を受講した教員があり、そこでの学びを日々の実践につなげたり、仲間にも広めたりすることができた。 ・個々の教員が得意分野を生かし日々の業務の実践するとともに、互いの得意分野を公表し、日頃から気軽に教え合い、学び合うことをとおして、より効果的な教育実践につなげることができている。 ・教職員の信頼関係も概ね構築できていると推測でき、それを生かした協力体制のもとで学校運営が行うことができている。 ・まだ十分とは言えないが、働き方改革を推進することができている。 ・校務支援システム等の活用も進んでおり、ある程度のスキルが蓄積されたものと考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、小規模校の特性を生かし、日頃から全教職員で声を掛け合い、支え合い助け合う職場環境・信頼関係の醸成に努める。 ・引き続き、得意分野を共有して日頃から学び合うとともに、対話型の校内研修に取り組み、学校全体の教育力・指導力の向上につなげる。 ・校務分担を見直し、学校全体の働き方改革の更なる推進をめざす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域未来塾について、教員はどう感じているのか。教員の負担になっていないか。 ・地域未来塾には、どのくらいの生徒が参加しているのか。 ・地域によっては学校で部活動をやめて、地域移行しているところもある。 ・学校に支援員は入っているのか。他校では入っている学校もある。